

## 『哲学の往復書簡』

著者	吉田 国臣, シラー フリードリヒ
雑誌名	星薬科大学一般教育論集
号	14
ページ	1-30
発行年	1996
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1240/00000198/">http://id.nii.ac.jp/1240/00000198/</a>

# 『哲学の往復書簡』

フリードリヒ・シラー

吉田 国臣 訳

前もって思い起こすこと

理性にはそれぞれの時代エポックがあり、心情ココロと同様にその運命がある。しかしその歴史が論じられることははるかにまれている。我々は諸々の情熱をその両極端に、また様々な過ちや行き着くところまで進めてみて事足りるとし、それらが個人の思考体系といかに深く関わっているかを顧みないでいるように思われる。倫理的な悪化の一般的根源は一面的で不安定な哲学である。そのような哲学は、朦朧とした理性を合法性、真理、確信などの仮象によって幻惑する。そしてまさにそのために生来の道徳的感情に縛られることが一層少ないが故に、なおさら危険なのである。これに反して啓かれた悟性は志操をも高める——頭脳アタマが心情ココロを形成しなければならぬ所以である。

1  
現今のような時代エポックに、つまり読書の容易さと普及が思索する読者層を驚くほど拡大し、無知であることに安んじている諦念が「半ばまで開かれた」啓蒙に席を譲り始めており、またわずかな者たちだけがなおも、「誕生の偶然によって投げ出された場所にとどまろうと」<sup>(1)</sup>望んでいる時には、目覚めつつ前進していく理性の一定の時期に注意を促し、何が倫理性に

結びつくのか、また至福や悲慘の源泉となりうるかについて、一定の真理と誤謬を報告し、少なくとも誇り高い理性がすでに蹟いたことのある、隠れた岩礁の在り処を告げることは、まったく無意味なことだとは思われない。極端なことによる以外に我々が真理に到達したことはめったになかった。そこで、穏やかな英知の美しい目標にまで登りつめるには——我々はまず誤謬を——そしてしばしば愚行を——とことん消耗させなければならぬのである。

真理と道徳的な美に対する同じ熱意に溢れている友たちが、行く道はまったく異なっても「同一の」確信で互いに結ばれ、いまや以前より穏やかな眼差しで己れの来し方を見渡し、思索のいくつかの革命と各時代<sup>エポック</sup>そして詮索する理性のいくつかの逸脱とを、性格の異なる二人の若者の生き生きとした描写中に展開し、書簡の交換の形で世に出そうという計画で一致をみたのであった。以下の書簡はこの試みの発端である。

従ってこれらの書簡に報告される意見はそれぞれの関連においてのみ正当でもあり、また見当外れでもあるのはまさに、世界がこれらの心情に反映しているからに他ならない。書簡の交換が進展することで、一面的でしばしば突飛でもあり、しばしば矛盾してもいるこれらの主張が最後には一つの一般的で純化された、確固とした真理に解消してゆくさまを立証することになるであろう。

懷疑論と自由思想は人間精神の熱狂的発作であり、良く組織された心にそれらが引き起こす不自然な動揺によって、最後には健康を確保するのに役立たなければならぬ。誤謬が輝かしくあればあるほど、誘惑的であればあるほど、真理への勝利も大きいし、疑念の苦悩が大きければただけ一層、納得と固い確信への要求も強まる。しかしこれらの疑念や誤謬を提出することは必要だったのだ。というのは病いが癒されるにはまず病気の認識がなされなければならないからだ。激越な若者がなおざりにするからといって、真理が失うものは何もないのと同様に、不品行な者が否定しても、美德や宗教が失うものはほとんどないのだ。

ここで述べたことは、以下の交換書簡がどの様な観点から読まれ批評されることを我々が望むかを提示するために、前もって言っておかなければならなかったことだ。

ユーリウスからラファエルへ

十月

君は去ってしまった。ラファエルよ、美しい自然も消え去り、黄葉が木々から落ちて、ほの暗い霧が生気のない野に柩を覆う布のように立ちこめている。一人寂しく陰鬱な土地を私は彷徨い歩き、大きな声で君の名を呼んでみるが、私のラファエルは答えてくれないので腹をたてている。

私は君の別れの抱擁に耐えてきた。君を連れ去った馬車の疾駆する悲しい音がとうとう耳から消えてしまった。幸せ者だった私は過ぎ去った喜びの上にすでに慰めの土丘を盛り上げていた。そして今や君はまるでこの世を去ってしまった魂さながらに新たにこの土地に甦り、私たちの散歩の折りの気に入りだったどの場所にも帰還の挨拶状をくれたのだ。この岩壁を「君」と並んで登ったことがあった、君と一緒にこの果てしない視界の中を歩いてぬけたこともあった。この櫃おなの黒い聖域で私たちは初めて友情の大胆な理想を考え出した。ここは精神の系統図を初めて広げてユーリウスがラファエルと大変近縁であることを発見したところだ。ここでは泉であれ、茂みや丘であれ、過ぎ去った至福に結びつく何らかの思ひ出が私の安らぎを的に狙い定めていないところはない。みな、みな私の回復を阻もうと結託していた。私がどこへ行こうと、私たちの別れのあの不安な場面を私は再び演ずるのだ。君は私をどんな人間にしまったのだ。ラファエルよ。近頃私はどうなったのだろうか。君は危険なほど偉大な人間だ。私が君を識ることが無かったとしたら、あるいは失うことが無かったとしたらどうだろうか。急いで戻ってきてくれ、愛の翼に乗って帰ってきてくれたまえ。さもないと君

の心のこもった植樹は失敗に終わってしまう。優しい心を持ちながらどうして君は自分が手掛けた作品を、完成には程遠いうちに、あえて見捨てられたのだろうか。君の誇らしい英知の支柱は私の脳髓と心臓のなかで揺らいでいる。君が建てた壮麗な宮殿が崩壊する。押しつぶされた虫けらは崩れ落ちた建物の下を泣きながら転げ回っている。

至福の楽園時代、私はまだ目隠しをされて人生を酩酊者のごとくよろけながら歩いていた——もっと先を望む私の出さざた願ひはことごとく私の父なる地平の境界を境に再び戻ってきた——明るい日没は私に何よりも高貴な美しい翌日を予感させた——政治的な新聞だけが私に世界を思い出させ、弔いの鐘だけが私に永世を思い出させ、幽霊話しだけが私に死後の弁明を思い起こさせた。私はまだ悪魔を恐れて震えていただけに一層熱心に神に執着していたからだ。私は「感じる力を持っていた」し、幸せだった。ラファエルは私に「思索すること」を教えた。そして私は自分の創造を悲しんで泣きたい気持ちになっている。

創造だって——いや、それは私の理性の許さない、意味のない響きにすぎない。私は何も知らず、私について知る者もないので、私はいない、と言われた時代があった。あの時代はもはやなく、私は創造された、と言われている。何百年も前に存在した、何百万の人びとについても、今では何も知られていない。それでも彼らは存在すると言われるのだ。始まりを肯定し、終わりを否定する権利を私たちは何処に求めるのか。思索する存在を放棄することは無限の慈愛に矛盾すると、主張される。いったいこの無限の慈愛は世界の創造をまっぴらして初めて生じたのだろうか。——いまだ精神の存在しなかった一時期があったならば、無限なる慈愛は先行する永世全体に対しては無効だったのだろうか。世界という建造物が創造者のひとつの完全性なら、世界の創造以前には創造者の完全性が欠けていたのだろうか。しかしそのような前提は完成された神の理念に矛盾する、だから創造はなかったのだ——私は何処へ行ってしまったのだろうか、ラファエル君。——私の推論の恐るべき迷路。私は神を信じれば、ただちに創造者を放棄する。創造者無しで足りるなら、私は何のために神

を必要とするのか。君は私に平和を与えていた信仰を私から密かに奪った。君は私が崇拝するところで、私に軽蔑することとを教えた。無数の事物は君の悲しむべき英知がそれらの秘密を暴くまでは私にとって貴いものであった。私は群衆が教会へ流れてゆくさまを眼にし、感激した信心の心が一つになって友愛の祈りとなるのを耳にした——二度私は死の床の傍らに立った、二度見たのだ——宗教の何と力強い奇蹟的な働きを——天国への希望が破滅の恐怖に打ち勝つさまを、そして生き生きとした喜びの光が死にゆく人の弱々しい眼に灯るのを。私は叫んだ、確かにあの教説は神のものに違いない、人間たちのもとで最善の者たちが信奉し、かくも強い勝利と、かくも奇蹟的な慰めを与えるものは。君の冷やかな英知が私の感激を消した。君は私に言った。同じく多数の人間がかつてはイルミン神の聖柱やジュピターの神殿に押し寄せ、同じく多くの人びとが同様に喜々としてブラーフマに敬意を表して薪の山に登ったことだろうと。君が異教にあってかくも忌まわしく思ったものが、君の教説の神聖さの証となるのだろうか。

自分自身の理性以外に誰も信じるな、とも君は言った。真理以外に神聖なものはない。理性の認識するものが真理なのだ。私は君の言葉に耳を傾け、あらゆる主張を犠牲にした。この島に上陸したときに、あの絶望した征服者のように私の船の全てに火を付けた、そして帰還の希望を捨てた。私はかつて自分があざ笑った意見では、もはや自らを慰めることはできない。私には自分の理性が今やすべてだ。神聖と美德と不死性の唯一の保証なのだ。これからは、この唯一の証人の矛盾に遭遇したり、推論に対する私の注意が衰えたり、私の脳髓の乱れた繊維が進路を誤ったとしたら、私の心は痛む。私の至福は今後は私の知覚の調和した拍子に委ねられている。もしもこの楽器の弦が私の人生の憂慮すべき時期に偽りの申立てをしたり、私の確信が血管の脈拍で揺らいだりしたら、悲しいことだ。

## ユーリウスからラファエルへ

君の教説は私の誇りをくすぐすった。私は囚われ人だった。君は私をあの日へと連れだした、黄金の光と量りしれない自由さとが眼を奪った。少し前には私は控えめな名誉で満足していた。わが家の良い息子、友人たちの友、社会の有用な一員とよばれることで。君は私を宇宙の市民に変えてしまった。私の望みは未だ偉大なものの権利には介入していなかった。私はこれらの幸運な人々を許していた、なぜなら乞食たちが「私を」許していたからだ。私は人類の一部をうらやむことで赤面することはなかった、何故なら遺憾に思わずにいられないような、もっと有力な者が幾らもいたからだ。今初めて私は、享受に対する自分の要求が他の兄弟の要求を上まわって重要なのではということを知られた。今やこの氣圈を越えたある階層が地上の支配者たちに比べてどれほど自分に相応しいのかどれほど相応しくないのかを、洞察した。ラファエルは了解や意見のすべての絆を真つ二つに切ってしまった。私はまったくの自由を感じた——というのも、ラファエルが言うには、理性は精神の世界では唯一の君主政体であり、私は脳に帝冠を戴いていたからだ。天上と地上のあらゆるものは私の理性が承認するもの以上には、何の価値も、評価も無かったからだ。すべての被造物は私のものだ、それらを享受する有無を言わせぬ全権を私は持っているからだ。完全なる精神の下で一段だけ下位の、全精神が私の同胞なのだ、なぜなら我々はみな「一つの」規則に従い、「一人の」主権者に忠誠を誓うものだから。

このお告げは何と崇高で素晴らしく聞こえることだろう。私の認識への渇きに対する何という蓄え。しかし——自然の不幸な矛盾——この自由で向上に努める精神は死すべき肉体の硬直した不変なゼンマイ仕掛けに編み込まれており、その些細な要求と緋い<sup>な</sup>合わされ、卑小な運命の軛に繋がれている——この神は虫けら達の世界に追いやられた。自然の途方も

ない空間はその活動のために開かれているが、ただそれは二つのイデーを同時には考えることを許さない。その両眼は神聖の太陽の如き目標まで、それを運ぶが、それ自体は時間の要素によつてはじめて、ゆっくりと骨折つてその目標に向かつて進んでゆかねばならない。一つの喜びを味わい尽くすには、それは他のものすべてを失わねばならない、つまり「二つの」無制限な欲望はその心にとつては大き過ぎるのだ。新たに獲得された喜びは以前のものすべてを失うことをそれに要求する。今の瞬間は先立つものの墓標なのだ。愛の一時の逢瀬はいわば友情の一時的に停まる脈拍のようなものだ。

何処へ眼をやっても、ラファエル君、人間は何と制限されていることだろうか。要求と成就との隔たりの何と大きいことか。——おお彼の安らかな眠りが妬ましい。彼を目覚ますな。彼は、自分が何処へ行かなければならないのか、どこからやってきたのかを訊ねはじめまでは、大層幸せなのだ。理性は地下牢の松明だ。囚われ人は光のことは何も知らない。しかし自由の夢は一瞬の後に一層の闇を残す頭上に輝く夜の稲光のように思えるのだ。私たちの哲学は恐ろしい神託の謎が解けるまで、追究を止めなかった、不幸なオイディプス王の好奇心のようだ。

ご自分の素姓をけつしてお知りになりませぬように！<sup>(2)</sup>

君の英知は、私から奪つたものの補いをするのだろうか。君が天国の鍵を持っていなかったのなら、何故君は私を地上から誘拐しなければならなかったのか。前もって君が、英知に至る道が疑念の恐ろしい深淵を通じて続いていることを知っていたのなら、何故ユーリウスのような穏やかな無垢な心にこの危険な企てを敢えて実行させたのか。

——私が善いことをしようとしても、



それに続いて非常に悪いことが起こるようなら  
 いっそ私は、その善いこともやめてしまします——<sup>(3)</sup>

君は人の住んでいた山小屋を引き倒し、立派な死の宮殿を代わりに建てたのだ。

ラファエルよ、私は君に私の心を要求する。私は幸せではない。私の勇氣は失せた。私は自分の力に疑いを懐いている。すぐに返事をくれたまえ。ただ君の癒しの手だけが私の焼けつく傷口にバルサムを注げるのだ。

ラファエルからユーリウスへ

ユーリウス君、私たちのと同様の絶えることのない幸運は、人間の運にとっては大き過ぎるのだろう。この考えが私たちの友情を完璧に享受するうえで度々私を悩ませてきた。当時私の至福を苦いものにしていたものは、私の今の状態を築にしようとするのに、益になる準備だったのだ。私は諦念の厳しい学校で鍛練されているが、将来の一致の喜びを得るために、運命に仕えて私たちの別離を軽い犠牲と見なすような慰めに対しては未だに敏感だ。君は「欠乏に耐えること」がどういふものか、今に至るまで知らなかったのだ。初めて君は苦しんでいるのだ。——

それでもひょっとしたら、私が丁度今君のもとから引き離されたことは、君にとって好ましいことかもしれない。君は、いわば一つの病に耐えなければならぬのだ。その病が再発しないことが確実になるように、君は自分一人だけで完全に癒せなくてはならない。自分に信頼感を強く感じられればそれだけ一層君は君自身の内にあらゆる回復力が脈打つを感じるだろう。人を欺くような姑息な薬によって一時的な痛みの和らぎを感じることが少なくなればなるほど、君が悪疾を

根底から絶つことに成功する確実性は一層増すのだ。

私が君の甘美な夢を覚ましてしまったことを、たとえ君の今の状態が苦痛であるとしても、今もって私は悔いていない。君のような心を早晚必然的に待ち受け、それが人生のいかなる時期だったら耐えられるかに全てが関わっているような危機の到来を私は何にも増して早めた。真理や美德に疑いをいだくことが恐るべきことである場合があるのだ。情熱の嵐の最中でなお、あれこれ考える理性の瑣末なこだわりと戦わねばならない者に災いあれ！ このことが何を命ずるにせよ、私はその全体を受け止めた。そしてそのような運命から君を守るには、この避けられない疫病を「接種」によって無害化すること以外に手だては残されていなかったのだ。

それ以上にどんな有効な時点をそのために選べただろうか、ユーリウス君。青春の力の真つ盛りに君は私の前に立った。肉体も精神も最盛期で、何の不安にも圧迫されず、情熱の鎖に捕らわれてもいず、偉大な戦いにも耐えるべく「自由で力強く」、中でも「信念」の超然とした落ち着きがその価値だった。真理も誤謬も未だ君の関心には織り込まれてはいなかった。それら二つには君の楽しみも美德も関係なかった。低級な放縦から君を奪還するような恐ろしい光景も無用であった。より高貴な喜びの感情がそれらに対しては君に吐き気を催させた。君は「本能」から、そして汚されていない道徳的品位から「善良」であった。君の倫理性については、その上に倫理性が置かれていないような建造物が倒壊しても、私は恐れるものは何もなかった。それに君の憂慮が私を不安にすることもない。憂鬱な気分がどのようなことを君の心に抱かせようとも、私には君のことが良く分かっているのだ。ユーリウス君。

恩知らずな人よ！ 君は理性を恥じている。理性が君にどんな喜びをすでに与えていたかを、君は忘れている。たとえ君が生涯にわたって懷疑癖の危険から逃れられたとしても、君にその能力も資格もある楽しみを、差し止めることはしないのが、私の義務であった。君の立っていた段階は、君に相応しいものではなかった。君のよじ登っていった道は、私が

君から奪ったもののすべてを埋め合わせるだけのものを、君に与えた。包帯が君の両眼から落ちた瞬間を君がどれほどの歓喜をもって祝福したか、今でも私は覚えてゐる。君が真理を把握したあの熱意が、ひよっとしたらすべてを覆いつくそうとする君の想像力を、君が恐れに身震いして後じさりするような深淵の縁に連れていったのかもしれない。

君の不満の源を見極めるために、君の研究の経過を私は探らねばならない。君の熟考の結果をいつもは書き留めて来たではないか。私にその書類を送りたまえ。そうしたら君に答えよう。――

ユーリウスからラファエルへ

今朝は私の書類に忙殺されていた。失われた論文を再び見いだした。誇らしい感動のあの幸せな時間に起草したものだ。ラファエル君、今やすべてが何と変わって見えることだろう。照明が消えた後の、舞台の木組のようだ。私の心は哲学を求めた。想像力が己れの夢を押しつけてきた。最も温かみのあるものが私には本当のものだ。私は精神の諸法則に従って研究し――無限のものにまで飛躍する。しかしそれが本当に存在することを証明するのを忘れていた。物質主義の大胆な攻撃が私の作品を倒壊させるのだ。

是非この断片を通読してくれたまえ、ラファエル君。どうか君が、消えていく私の熱狂の火花を再び燃え上がらせ、私に自分の創造的精神と和解させることに成功されんことを！――でも私の誇りは深く傷ついているので、ラファエル君の喝采でもはや奮起させられないだろう。

## ユーリウスの神智学

## 世界と思索する本質存在

宇宙は神の一つの想念である。この理念的な精神の像が現実へと移行し、誕生した世界がその創造者の設計図の意図を實現した後——この人間的な表現を許してほしいのだが——そのときにはあらゆる思索する本質存在の使命は、この現存している全体内で最初の素描を再発見することであり、機関には規則を、組成には単位を、現象には法則を探し出すことであり、また建造物の場合は見取図にまで遡って書き写すことである。従って私にとっては自然界にただ一つの現れ、すなわち思索する本質存在があるのみである。私たちが世界と呼んでいる、あの大きな組成は、今では例の本質存在の多様な表出を私のために象徴的に表現すべく存在しているだけに、依然として注目値するものである。私の内や外にあるものはみな、私に似た力の神聖文字にすぎない。自然の諸原則は、思索する本質存在が自己を他に理解させるため、思索する本質存在を組み合わせている符牒なのだ——つまりそれを用いてあらゆる精神が最も完全な精神と、そして諸精神が互いに交渉するアルファベットなのだ。調和、真理、秩序、美、卓越は私に喜びを与える。なぜならそれらは、その発見者、所有者の活動状態に私を置くからであり、理性的に感じる本質存在の实在性を私にそれとなく分かせ、この本質存在との親和性を私に予感させるからである。真理のこの領域での新しい体験、重力、発見された血液の循環、リンネの自然体系などは、私には元来、古典古代文化がヘラクレスの神殿で掘り出されたも同然のこと——両者は同じ精神の照り返し、私に似た本質存在との新しい出会いにすぎない。私は自然の道具によって、つまり世界史によって無限のものと互い

に話を交わすのだ——私が芸術家の心をその作品のアポロ像に読み取るのと同じように。

ラファエル君、君が確信を得たいなら、遡及的に考究して欲しい。人間の靈魂のあらゆる状態は、それによって物語られる物理的な創造に何らかの例えを持っている。そして芸術家や詩人だけでなく最も抽象的な思想家でさえも、この豊かな資料庫から素材を借りて創作するのだ。活発な活動を私たちは火に例え、時間はここから流れてゆく河であり、永遠は円環であり、秘密は真夜中に身を包み、そして真理は太陽に住む。確かに、人間の精神の未来の運命でさえが肉体の創造の暗い託宣に前もって告知されていることを、私は信じ始めている。大地の懷から植物の芽吹きを促す、毎年おとづれる春は不安な死の謎について私に説明を与え、永遠の眠りに対する私の不安な憂慮に反論する。私たちが冬凍えているのを見つけた燕が、春には再び生氣を取り戻しているのを見いだすこと。死んだ毛虫が蝶になって若返り空中に飛び揚がることなどが、私たちの不死性の恰好な象徴を提供している。

今や私には万物は何と不思議に見えることだろう。——今こそ、ラファエル君、万物が私の周りには溢れている。私にとってもはや自然の全体に荒涼の地は存在しない。私が肉体を見いだすところでは、私は精神を予感する。——運動に氣付くところには、私は思考を推測する。「死者の葬られていないところには、復活する者もないであろう」<sup>(4)</sup>、と確かに今でも全能者がその作品を通じて私に語りかけている。そのようにして私は神の偏在の教説を理解するのだ。

## 理念

あらゆる精神は完全性に引き寄せられる。すべてのものが——この表現には迷いが生じるが、ただ一つの例外もなく——すべてのものはその諸力を最高度に自由に発現した状態を獲得しようと努める。良いもの、優れたもの、魅力あるも

のと認めたものすべてを、自己に引き寄せ、自分のものとし、その活動を拡大しようとする共通の衝動を、すべてのものが持っている。美しいもの、真実なもの、卓越したものの直観はこれらの諸特性を瞬時に所有することである。どのような状態を知覚するのか、私たち自身でこれらの中に入ってみよう。これらのことを私たちが考える瞬間には、私たちは美德の持ち主であり、行動の主唱者であり、真理の発見者であり、幸福な体験の持ち主である。私たちが自身が感受された対象なのだ。ここで曖昧な微笑によって私を動揺させてはならない、ラファエル君——この前提が以下のすべてを根拠づける理由でもあり、私の建築を完成する勇気を持つに先立って、私たちが一致していなければならないことなのだ。

似たようなことを誰しもの内面の感情が語るものである。例えば私たちが寛大な行為、勇気ある行動、賢明な行動などを賛嘆するとき、私たちの心にも同じことを行う力があったという、密かな意識が呼び覚まされなければならないだろうか。そのような話を耳にしたときに、私たちの頬を染める紅みが、「私たち」の謙虚な心は賛嘆のあまり震えていることを、すでに物語っているのではないだろうか。また私たちの本性を洗練すれば称賛を得るはずであるというようなとき、そんな称賛には「私たちは」当惑しないだろうか。確かに私たちの肉体自体がこの瞬間には行為しつつある人間の振る舞いに同調しているのだし、私たちの靈魂がこの状態と溶け合っていることを、明確に示しているのである。ラファエル君、もしもある大きな事件が多数の人の集まる集会で語られる場に居合わせたら、君はその話し手自身が聞き手の称賛を期待しているさまを見届けもし、またその英雄に供された聴衆の喝采を存分に浴びるさまを眼にしたことだろう。——そこでもし君が話し手だったら、自分の感情がこの幸せな錯覚に不意を突かれて驚くようなことはなかっただろうか。ラファエル君、その例をあげてみよう。例えば私が心の友とさえも、美しい逸話の傑出した詩の朗読をめぐる如何に激しい言い争いをしかなかったかを。また私の心は密かに告白したものだ、ただ作者から朗読者に移る名誉の月桂冠のためだけで君を羨んだことを。美德に対する素早い心からの芸術感情は、だから一般的には、美德に対する大きな才能とみなされるのだ。逆にまた

その頭脳が道徳的な美を理解するのに苦勞もし時間もかかるような、そういう男性の心を疑うのには何の躊躇も要らないのである。

完全性を活き活きと認識した場合には対立する障害は存在しないことがまれではないし、卓越性に対する高い感激が悪人の心にも浮かぶことはしばしばである。ときには弱者の心さえもヘラクレスのような偉大さへの熱狂が燃えて貫くこともある。そういうことに、私は異議をとねえるつもりはない。例えば私の知るところでは、驚嘆すべき我らがハラーが自惚れた虚栄心のような、評価は高いがその実取るに足りないものの仮面を敢然と剥いだのである。彼の哲学上の偉大さに私は賛嘆の喝采を送るものであるが、まさにその彼にしても、自分の偉大さを損なうような、騎士勲章のなお一層の無価値さを軽んずることができなかった。理想の幸運な瞬間に芸術家や、哲学者そして詩人が彼らの構想している、偉大で優れた人間が本物であることを私は確信している——しかしこの精神の高貴化は多くの場合に不自然な状態に過ぎないし、血が生氣をおびて沸き立つことで、想像力の飛躍を招来するものでもある。一方まさにその故に他のあらゆる魅惑と同様に束の間に過ぎ去るものでもある。またより低次の感情を容赦無く解き放った心はそれだけなお消耗しているものである。それだけ一層消耗した、と私が言ったのは——一般的な経験が教えるところでは、罪を重ねた犯罪者は一層の怒りを懷いた者であるのが常であり、美德からの変節者は悔恨の厭わしい強制によって悪徳の腕の中でのみ一層甘美な回復を遂げるということである。

ラファエル君、私が実証したいのは、私たちが未知のものを感ずるとき、それが私たち自身の状態であることだ。完全性の表象（イメー）を私たちが呼び覚ました、その瞬間に、完全性は私たちのものとなるということ、真理や、美や徳に対する私たちの満足は自分自身が高められたこと、自身が豊かになったことを自覚することで最終的には成就するということなのだ。また私は自分がそれを実証したと信じる。

私たちは最高の本質存在の英知や、その慈愛、その正義などについての概念を持っているが、——その全能の概念は持っていない。その全能を記述するためには、無、その意志と、何物かの、三様の継起を個別に表象することが役立つだろう。それは荒涼とした闇であり——神が「光よ」と呼ばれると——光が現れる。私たちが働きつつある全能の現実のイデアを持てるなら、私たちは「彼」と同じく、創造者でもありえよう。

従って、私の知覚する、あらゆる完全性は、私自身のものとなり、それは私に喜びを与える、なぜなら完全性が私自身なのだから、私は完全性を強く望む、なぜなら私は私自身を愛するからだ。自然の中の完全性は物質の特性ではなく、精神の特性なのである。全精神はその完全性によって幸福なのである。私は全精神の幸いを切望する、なぜなら私は自分自身を愛するからである。私が思い描く、至福感が、私の至福になる。だからこれらの表象を呼び覚まし、増強し、高めることに私の関心はある。——従って至福を私の周りに拡げることに関心はある。いかなる美、いかなる卓越性、いかなる喜びであれ私の外に生み出すものを、私は私から生み出すのである。私が無視し、破壊するものを私は破壊し、無視する。——私は他の人の至福をつよく望む、なぜなら私は私自身の至福を望むからである。他人の至福を望むことを私たちは好意、「愛」と呼ぶのである。

## 愛

さあ、ラファエル君、私の周りを見てみよう。高度が上がり、霧が晴れ、まるで花の咲く景観のなかのように無限の存在のただ中に私は立っている。より純粹な陽光に当たって私の概念はことごとく純化されたのだ。

愛、つまり——魂を与えられた被造物の最も美しい現象、精神界の全能の磁石、敬虔と至高の美德の源泉——愛はこの



唯一の始源の力の反映、卓越したものの魅力、人格の瞬間の交換に基づく、諸々の本質の混同にすぎない。

私が憎むとき、私の何かが失われる。私が愛するとき、私が愛したものの分だけ、私は豊かになる。許しは譲渡された所有物を取り戻すことであり、人を憎むことは引き延ばされた自殺である。すなわちエゴイズムは被造物存在の最高度の貧困である。

ラファエルが私の最後の抱擁から身をもぎ放したとき、私の心は引き裂かれたのだ。そして私のより美しい半身の喪失を悲しんで今も涙しているのだ。あの幸せな晩に——思い出して欲しい——あのとき私たちの心が初めて互いに熱のこもった触れ合いを経て、君の偉大な感情は私のものとなった。君の卓越性に対する私の永遠の所有権を表明した——君に愛されることより、君を愛することを一層の誇りとしながら。なぜなら君を愛することが私をラファエルの虜にしていたからだ。

永久なる愛の同盟に

我らの心を促したのは

この全能のいとなみではなかったか。

ラファエルよ、君の腕かみをとり——おお無上の喜び

いざ私も喜びもて完成の行進に加わろう

大いなる精神の太陽に向かって。

幸いなるかな、君をみいだした私は

何百万のなかより君と縁<sup>よだじ</sup>を結び

何百万のなかより「私<sup>わたし</sup>のもの」となった君。

荒々しい混沌を繰り返させよ

諸々の原子を攪乱せよ

我らの心は互いの心に永久<sup>とこ</sup>に流れ入る。

私は自らの煩悩の照り返しを

君の炎のような双眸から吸わずともよいのか

ただ君の心の中にある己れの姿を賛嘆するのみだ。

美しい地上がより美しく描かれ

友の振る舞いに一層明るく

魅惑的に天上が反映するのだ。

苦悩の嵐から甘い安らぎを求めて

不安な涙の重荷を重い心で

愛のふところに投げおろす。

苛むような恍惚であっても

ラファエルよ、君の心の眼差しに

耐えられず官能の墓を求めるのではないか。

森羅万象にただ一人佇むならば

岩壁の巖に心の宿りを夢見

腕を絡めて口づけするであらう。

私の嘆きの声は空中に響き

岩壁の裂け目が答えて、私を喜ばす

立派な門だ、甘き共感の入口よ。<sup>(5)</sup>

愛は同じ響きの心の間には生じないが、調和する心の間には生まれるのである。私は君の鏡像のなかに私の諸感情を認めて満足するが、私には欠けている高次な感情なら、熱い憧れをいだいて、むさぼるようにして取り込む。一つの規則が友情と愛を導いている。柔和なデスデモーナは、オセロが耐えた危険の故に、オセロを愛したのであり、雄々しいオセロは、彼女が彼のために流した涙の故に、彼女を愛したのである。

人生には、あらゆる花々や遙かな星辰、虫そして予感される高次の精神を、胸に押しつけたい気分になる瞬間があるものだ。それは全自然を、愛する人同然に抱擁するに等しい。君は私の気持ちができるだろうね、ラファエル君。大小の自然のうちに、あらゆる美、偉大さ、卓越性を読みとり、かつ自然の多様性の偉大な統一を見いだすことに成功した人間は、すでに神性のごく間近にあるのだ。森羅万象のすべてが彼の人格と一つになって流れている。人間はだれしも全ての人を愛するなら、誰もが世界を自分のものとすることになるだろう。

私たちの時代の哲学は、私はそれを恐れるのだが、この教説とは相容れないのだ。私たちの思索する頭脳の多くは、人間の心から生まれたこの天土的な欲求を笑って無視し、この神性の明瞭な特徴を消し去り、このエネルギー、この高貴な熱狂を、小さな無関心の冷たい死の息吹のなかで解消することに心を配ってきたのである。彼ら独特の屈辱の奴隷根性に捕らわれて、彼らの狭い心には神々しすぎる現象を説明するために、好意の危険な敵、利己心と折り合いをつけてきたのである。見すばらしいエゴイズムを素材に彼らは自分たちの慰めのない教説を紡ぎだして、彼ら独自の制限を創造の尺度にしたのだ——鎖の音を響かせながら自由を誹謗する、墮落した奴隷達である。スウィフトは、愚行の欠点を人類の破廉恥にまで極端化し、同類のために立てた晒し柱にまず自分自身の名前を記した。これらの危険な思想家に比べても、スウィフト自身、人間の自然に対してこれ以上の致命的な傷を負わせ得た者はいないが、彼らは鋭い洞察と天才の浪費によって利己心を飾り立て、一つの体系にまで洗練した思想家達なのだ。

その成員の幾人かが自分達の価値に気後れを感じたとて、それがなぜ種族全体の価値を下げることになるのだろうか。私は率直に告白するが、私心のない愛の現実性を確信している。もしそれが存在しないなら、私は失われている。私は神を放棄し、同時に不死性と徳性をも棄てる。私は愛を信じることを放棄するとき、もはやこれらの希望に対する証拠には関心がない。自己のみを愛する精神は、果てし無い空虚な空間を漂う一個の原子のようなものである。

#### 献身

ところが愛は、その本性に矛盾するように思える諸作用を生み出したのである。

私が他人の幸福感到に寄与するために提供する犠牲によって、自分自身の幸福感を増すということは考えられることだ

——しかしこの犠牲が自分の生命だったとしてもそうだろうか。歴史にはそのような犠牲の例があるし——ラファエルの救出のために死ぬことは、私にとつては何の犠牲も要しないだろうと、はっきりと感じられる。死を、私たちの楽しみの総量を増すための、一手段と考えることなど、可能だろうか。私の存在を放棄することと私の本質を豊かにすることとを如何にして調和させられるだろうか。

不死性の前提はこの矛盾を生み——また一方でこの現象の高い優雅さを常に歪めもする。報われる将来を顧慮することは愛を排除する。不死性を信じずに満足すると同時に、また破壊の危険を冒しても上述の犠牲を成就するような、美徳もあるにちがいない。

たしかに目先の利を永遠の利益の犠牲に供することがすでに、人間の心を高貴にすることである——エゴイズムの最も高貴な段階である——がしかしエゴイズムと愛とは人間性を、極めて似たところの少なく、かつその境界が混じり合うことが決してない、二つの類に分ける。エゴイズムはその中心を自己のうちに設けるが、愛は自己の外部にある心を永遠の全体性の座標軸に取る。愛は一致を目指し、エゴイズムは孤立に向かう。愛は花咲く自由の国家を共同統治する市民であり、エゴイズムは荒廃した被造物に君臨する専制君主である。エゴイズムは感謝を求めて種をまき、愛は忘恩に蒔く。愛は贈り、エゴイズムは貸す——正邪を分ける真理の玉座を前にしては、間近な瞬間の享受、ないしは殉教者の冠の兆しは問題ではないし——また利子がこの世で下りるのか他生で下りるのかは問題ではない。

ラファエル君、全人類の遙かな先の世紀に恩恵となるような真理を考えてくれたまえ——さらに、この真理はそれを知る者に死刑を宣告し、彼が死ぬ時に初めて、証明され、信じられることも付け加えよう。それから明るく視野の広い天才の太陽の眼差しをしており、靈感の炎の輪を持ち、愛に対する完全で崇高な生来の才能を具えた男のことを考えてみてくれたまえ。彼の心にかの偉大な作用を持つ完全な理念を呼び覚ましてくれたまえ——彼の作りだすはずのあらゆる幸せ

を、彼のぼんやりと予感する心に描いてみせてくれたまえ——現在と未来を同時に彼の精神に集中させてみたまえ——そしていま自らに答えを出したまえ、こうした人間に他の生を指示する必要があるのかを。

これらの感情の総体は彼の人格と纏れ合い、彼の「自我」と一つに溶け合って流れることになるだろう。彼がいま心に懷いている、人類というものは彼自身なのだ。それは「彼」の生がその中を、忘れられかつ無くてもすむものながら、まるで一滴の血のように漂い流れていくような「一つの」肉体なのである——なんと速やかにその肉体はその一滴を己れの健康と引換えに散逸することだろうか。

## 神

宇宙における完璧なものはすべて神と一つになっている。神と自然は、相互に全く等しい二つの偉大なるものである。神的な物質のなかに「共に」存在する、調和のとれた活動の総体は、自然のなかに、この物質の無数の位階や、尺度や段階に応じた模造となって「散在」している。自然は（形象的表現をゆるしてもらいたい）、いわば無限に分割された神である。

プリズムガラス中で白い光線がやや暗い七色の光線に分割されるように、神の「自我」は無数の感受性のある物質に分割されたのである。七つのやや暗い光線が再び混ざり合って「一つ」の明るい光線になるごとく、これらの物質の全てが一つになることによって神の本質が生じるのだらう。自然の構成物の現存する形態は光学ガラスであり、精神の活動の全てはかの単一の神的光線の無限な色彩の遊戯にすぎないのである。全能者がかつて、このプリズムを破壊する気になった時、全能者と世界との間の境界は壊れたのだ。全精神は「一つの」無限なるものに没し、全和音は「一つの」ハーモニー

に流入するだろう。小川は「一つの」大洋に流れ込んで尽きることだろう。

諸要素の引力が自然の身体的形態を実現したのだ。精神の引力は無限に複製を重ねて、ついにはかの分離を解消せざるをえないだろう。あるいは（そう言ってもよいだろうが、ラファエル君）神を持ち出さざるをえないだろう。そのような力が例の愛なのである。

だから愛は、ラファエル君、私たちがよじ登って神の似姿にいたる、梯子なのだ。欲せずして、自覚することもなく、目標に私たちは向かっているのである。

憎むときには、我らは死者の群れであり、

愛しつつ互いに抱き合い、

甘美な義務の鎖を渴望するとき、神々に等しいのだ。

創造に与らなかった、数知れない精神の、

数千層の階程を経て上昇し、

神のごとく統べるこの衝魄。

腕と腕をくみ、より高く

蛮族から、熾天使の座に連なる、

ギリシャの予言者にいたるまで

我らは心の一つにして輪舞を踊る、

永遠の輝きの海に、時の尺度を超えて  
死の門を潜るまで。

友を持たなかった偉大な世界の師は、  
不足を覚えて、諸精神を創造した、  
その至福の反映として。

至高の存在は並ぶものを見い出せず、  
全ての存在界の聖杯からは

その無限性が溢れ出る。

愛とは、ラファエル君、輝きのない石灰を素材に、「王位」を奪われていた黄金の復位を可能にする、錬金術の秘石  
なのだ。つまり、無常なものから永遠のものを、そして時の破壊的な炎から持続の偉大な託宣を救い出すものなの  
である。

あらゆる既存のものの総体とは何だろうか。

卓越性を「洞察」すれば、それは私たちのものとなる。高い理想の統一性に信頼を寄せるなら、私たちは友愛によっ  
て互いに結ばれるのだ。美と喜びを植えるならば、美と喜びの実りを得る。明るい思索は、私たちに情熱的な愛を生  
む。汝らの天の父が完全であるごとく、汝らも完全であれと、我らの信仰の始祖が言っている。薄弱な人間性はこの  
使命を曇らすのである。だから、かの人は明言した、汝らは互いに愛しなさいと。



太陽の眼差しをもつ英知  
偉大なる女神は、愛を避けて  
退く。

険しい恒星の軌道を  
雄々しく進み

神の御座に至ったのは誰か。

聖所を引き裂き

奥津城の裂け目から

あなたにエリュシオンを示したのは誰か。

「女神は」我らを招きはしなかったろうか

我らは不死を望まなかったろうか。

諸々の精神もまた女神を失って

師を求めなかったろうか。

愛だ、愛だけが

自然の父のもとへ

愛だけが諸精神を導くのだ。<sup>(6)</sup>

ラファエル君、ここに述べたものは私の理性の信仰告白、つまり私の創作の簡単な梗概なのだ。君がここに見いだすように、君自身が私の心に撒いた種子が芽生えたのである。さあ嘲笑うなり、喜ぶなり、君の弟子を見て赤面するなりするがいい。だが君の望みどおり——この哲学は私の心を高貴にし、私の人生の展望を美しいものにしてくれた。私の最善のもの、私の諸々の推論の基礎は全て移ろいやすい夢の像であったかもしれない。——私がここに描いた世界は、もしかしたらはかならぬ君のユーリウスの脳髄での真理であり、——もしかしたらあの審判者のいう何千年何万年のさきに、彼が約束した更に賢い審判者の前に出たときには、私は本物の原作を眼の前に自分の未熟な素描を恥じて、細切れに切り裂く結果になるのかもしれない。<sup>(7)</sup>——これらの全てが的中するかもしれないし、自分でもそれを願っている。だがその時には、たとえ現実が私の夢に決して似たところがないとしても、その現実がそれだけ一層私を魅惑するものとなり、かつ威厳を増して私を驚かすことだろう。「私の」諸理念が永遠の創造者の理念に勝ることなどあるだろうか。一体どのようにして。創造者は自分の崇高な芸術作品が死すべき定めの識者の期待を下回ることに甘んじるだろうか。——まさにそれこそが偉大な完成の鉄火の試練であり、至高の精神のいとも甘美な勝利なのである。なぜなら、認識の誤った推論と錯覚といえども無駄ではないし、常軌を逸した理性の、まるで蛇のように曲りくねった筋道が究極的には永遠の真理の方向に向かって進むことになり、結局はそれらの流れの背信的な支流といえども同じ河口に流れ込むのだから。ラファエル君——名工はどのような理念を私の心に呼び覚ましたことだろうか、その姿は、何千もの模写を重ねて変形したとしても、その何千ものなかに依然として似姿を保っているし、拙い仕事師の荒れすさんだ手になるものでも崇拜を禁じることはできないのだ。

ところで私の表現は全くの誤りかもしれないし、全く正しくないかもしれない——さらに言えば、その表現が必然的なものであるにちがいないと確信しているのだが、それにもかかわらず、すべての結果はそこから実現するということが、可能なのだ。私たちの知のすべては、世界の賢者のすべてが一致している如く、結局はありきたりの誤謬となるのである。

そうとしても厳密な真理でさえがその誤謬を用いて組み立てられているかもしれない。私たちの純粹な概念でさえ決して諸物の「形象」ではなくて、それらに必然的に定められた、共在する「標識」にすぎないのである。神も、人間の心も、世界も本当は私たちが思い込んでいるようなものではない。これらの事物についての私たちの思想は、私たちが住んでいる惑星が私たちに委ねている、特有の形式にすぎない——私たちの脳髓はこの惑星に「属し」、従ってそのうちに保存されている諸概念の特殊言語もこの惑星に属するものであらう。しかし心の力は独自であり、必然であり、常に同一である。つまり、それが表現される、素材の恣意性は、それが則って表現される、永遠の法則に照らせば不変である。この恣意がそれ自体と矛盾しないかぎりで、またその徴候が本体を徹底的に忠実に表すものであるかぎりで。そこで、思考力が特殊言語の表す関連範囲を發展させるにつれて、事象における対応範囲もまた現実に存在せざるをえない。従って真理は特殊言語の特性ではなく、帰結なのである。言い換えれば本体と徴候との類似性や、対象の概念との類似性ではなく、この概念が思考力の法則と一致することが真理なのである。同様に紙の上以外には存在しない、数字の数論が役に立つし、それによって、現実の世界に存在するものが見つかる。たとえば、AとBの綴りはどの様な類似性を持つだろうか、また $\div$ と $=$ 、 $+$ と $-$ はそれがもたらすはずの事実とどのような類似性があるのだろうか。——何といっても何百年も前に知られていた彗星が天空の片隅に上がり、やはり予期された惑星が丸い太陽の前面を通過するのだ。過つことのない予測に基づいて新世界の発見者コロンブスは、既知の半球の欠けた半分、つまり彼の海図の空白を充たすはずの、巨大なアトランティス島を求めて、未知の海との容易ならぬ賭に挑んだのである。彼はそれを、つまり彼の海図上の島を発見したのであり、彼の計算は正しかったのである。もしも計算が少し足りなかったら、また悪意の嵐が船を破壊したり故国へ押し戻したりしたらどうだったろう。——というのは、理性が感覚の助けを借りて無感覚のものを測ったり、その推論の数学を「人間を超えたもの」の隠された物理学に応用するときに、人間の理性は似たような計算をするものなのである。しかしその計

算には最後の検討が欠けている、なぜなら自分の発見を伝えるために、かの地からもどった旅行者がいなかったからである。

人間の自然にはそれに独特の制限があるし、個人にはそれ自体の制限がある。前者については互いに慰め合い、後者についてはラファエルはユーリウスの少年時代という点を考慮することだろう。私は諸概念に不足し、異郷の人は、この種の探究に不可欠とみなされる事情に疎い。私は哲学の学校について耳にしたことはないし、印刷物を読んだこともほとんどない。私はここかしこで私の想像力を厳格な理性の推論に差しはさんだり、沸き立つ血潮や、心の予感や欲求を冷静な英知を売り渡して手に入れたりすることがあるかもしれない。またそのことは、友よ、やはり失われた瞬間を悔やむようなことになりたくはないからだ。それは一般的な完全性の現実的な利点であり、道に迷う理性も自ら混沌とした夢の国の住人となって、矛盾の荒れ地の開墾にあたるべきだということが、最も英知にみちた精神の予見したことだったのである。原石のダイヤモンドをブリリアント型に磨く「あの」機械論の名工だけではなく——卑しい石をダイヤの輝く品位に高める、他の芸術家も尊重すべきである。形態における丹精がときに素材の純粋な真理を忘れさせることがある。思考力のあらゆる錬磨とはいえないまでも、精神のあらゆる繊細な鋭さは精神の完全性にいたる小さな段階ではないだろうか、それにどのような完全性も完璧な世界のなかに存在を勝ち得なければならなかったのだ。現実はずしも絶対的な不可欠性にもまで縮小されるとは言えない。つまり現実とは条件次第の不可欠性をも包括するのである。従って、脳髓のあらゆる誕生や、機知のあらゆる網目はこの創造の、より偉大な意味に反論の余地のない市民権を持つのである。自然の果てしない見取図では活動が止まることは許されなかったし、広く幸福感が行き渡るためには享受の度合いが欠けてはならなかったのである。世界の偉大な家政は、一片のかけらを無駄に落とすこともなく、いまだ何らかの生の享受の余地を持ちつつも、住むものの無いどんな空白も残さない。毒を持ち、人間を敵視する、蛇や蜘蛛に充ちた場所であろうと、また死せる腐敗の地

といえども、官能的な小さな花のような植物を送る。ときにそれが狂い咲くこともあるが、その経済性を考慮して授けることも忘れない。さらには悪徳や愚行を終には巧みに作り変えて、タルクイヌス・セクストスの淫らな行為から、世界を支配するローマの偉大な理念を紡ぎだす術を心得ていたのである。——この創意に富んだ精神ははたしてその大きな目的のために「誤謬」を乱費することも無ければ、人間の心のうちの広大な世界を荒れたままに、また喜びの無いままに放置することも無いのだろうか、そんなことはない。理性のあらゆる手腕は、たとえ誤謬においても、真理の受胎のためにはその手腕を増すものである。

我が心のかげがえのない友よ、人間の英知の広い蜘蛛の網に、私の網を懸けるのを許してくれたまえ、太陽の姿は朝の霧の雫の中では異なつて描かれるだろうし、陸地に縁取られた大洋の壮麗な鏡のなかでも異なるだろう。しかし一度として太陽の姿を受けも返もしない、どんよりと曇った沼地に恥をかかせないでくれたまえ。何百万もの草木は自然の四元素から飲んでゐる。「一つの」貯蔵庫は全てに開かれてゐるけれど、それらの出す樹液は何百万種の異なる混ぜ合わせ方をされて、何百万もの異なつたものを再び産みだすのだ。美しい多様性はこの家の主人の豊かさを物語っている。四元素とは、それから全ての精神が産みだされる、「自我」と「自然」と「神」と「未来」である。全てはそれらを何百万種にも混ぜ合わせ、何百万種の異なつたものを産みだす。しかし、固定した座標軸のごとく、あらゆる宗教や制度を通じて共通のものは「一つの」真理だ。——「君達の愛する、神に近づきたまえ」

### 《訳者のあとがき》

ここに訳出したいわゆる「哲学書簡」はフリードリヒ・シラー（一七五九—一八〇五）が一七八六年三月に自ら主宰し

た雑誌『タリーア』誌上（第三分冊）で発表したものである。しかし、その構想はすでに作者が陸軍大学、通称「カール学院」において医学を修めて卒業した一七八〇年前後にまで遡るとされ、書簡の中央に位置する「ユーリウスの神智学」には若きシラーの哲学的思想ないしは世界観を窺うことが出来る。当初作者は一種の哲学的な書簡体小説を企図し、その一部はすでに、一七八一年には出来上がっていたことが推測されている。なぜなら、『一七八二年の詞華集』所載の詩「友情」の中心部分が上記の「ユーリウスの神智学」に挿入されているだけではなく、この詩には「未刊の小説から、ラファエル宛のユーリウスの書簡より」という言葉が添えられているからである。またユーリウスがシラー自身の分身であることは、作者の初期の作品や後に義兄となるラインヴァルト宛の手紙（一七八三年四月一四日付）によってそれを跡づけることが出来る。さらに、ここにただ一通のみ収められている「ユーリウス宛のラファエルの書簡」はシラー自身の草したものではあるが、一七八四年にシラーと知り合い、以後良き理解者であるとともに援助者として詩人の終生の友となったゴットフリート・ケルナーが、後年「ラファエルの書簡」部分を引き受けることを約したのであった。事実ケルナーはラファエルの第二書簡を草し、それは一七八九年に『タリーア』誌、第七分冊に掲載された。しかしこの書簡体の小説は結局完成するには至らず、未完の断片に終わった。ところで、このユーリウスの手紙の相手であるラファエルという人物に託された思想的特性は懐疑的・批判的かつ唯物主義的な立場を代弁するものではあるが、むしろ実際にケルナーがそのような人格をそっくり具えていたわけではないであろう。同様にユーリウスがシラーの全くの分身というわけでもないであろう。むしろ書簡の冒頭に付された「前もって思い起こすこと」の中でも作者が述べている如く、あくまでも当時作者の心を占めていた思想状況を架空の二人の若者の心的交流に仮託して展開した詩人の空想の産物であることは作者のことわり書きに見るまでもないであろう。また作中の記述にスピノザ、ライプニッツ等の思想家との類似点を探ることも出来るであろう。ただし今はそれを論じる場ではない。訳者としては若き詩人の心の軌跡を知る上で、貴重なこの作品を紹介す

るに止めたい。

《注》

- (1) レッシングの『賢者ナータン』三幕五場より。
  - (2) ソフォクレス作の『オイディプス王』より。イオカステの言葉。
  - (3) レッシングの『賢者ナータン』四幕七場より。
  - (4) クロプシュトックの『メシアス』第一稿より。
  - (5) シラー『一七八二年の詞華集』の詩「友情」《Die Freundschaft》より。
  - (6) 同右の詩「愛の勝利」《Der Triumph der Liebe》より。
  - (7) レッシングの『賢者ナータン』三幕七場より。
  - (8) ローマ人に征服される以前に北イタリアを支配していたエトルリア人諸王の一人。
- なお翻訳に際しては、主として Friedrich Schiller, *Sämtliche Werke*, Carl Hanser Verlag, München 1959, Bd. V を参照した。